

週刊 建設ニュース 40－6月第2週
昭和37年6月11日発行(毎月曜日発行)通巻第40号

対談
(第1回)都市計画にヒューマンスケールを

RIA建築総合研究所 山口文象
建築評論家 川添 登

建築年鑑賞をめぐる

川添 この間、朝鮮大学が“建築年鑑賞”を授賞されたそう、今日はそのことから伺いしましょうか。

山口 あれも発表はいろいろな意味でしなかったんですね、政治的な意味があつて。けれどまあ一応ほじくり出されたというか、今まで大体建築賞というのは、建築雑誌に出たものからですが。あれは全然発表してないんですから、そんなことから少し違った意味がありますね。

川添 年鑑賞の今までのいき方には必ずしも賛成してなかったのですが、こんどは非常に賛成で、朝鮮大学に決まったということは嬉しかつたです。たいへんいいんじゃないかと思って。このあいだ宮内嘉久君に会ったときこういう話をしたんです。というのは、建築を評価するのに二つの仕方があると思うんです。一つはあくまでも結果として……結果といっても主としてデザインの良し悪しそれで評価するという立場。もうひとつは社会的意味とか、造られるプロセスの問題ですね。そういった問題が建築では非常に重荷な問題であつて、これが朝鮮大学などで高く評価されたんじゃないか。朝鮮大学が賞を得られたというのは、年鑑賞を審査する態度を決定する意味で大へんよかった。

たとえば八戸の貯炭場ですね。あれなんか賞を与えた意味心たいへんよくわかってくるし、非常にいい選定だった。

そのことを宮内君に話したんですが、そういう点で私個人としては朝鮮大学のいろいろな苦労談とか、すでにお聞きしたことがあるんですが、読者の皆さんはご存知ないでしょうから、少しその点について……。

朝鮮大学が賞を受けた意味

山口 いまいったように朝鮮大学のデザインそのものは、ほかの優秀な建築家たちがやっている作品と比べてみて、それほど優秀であるという自信も私共にはないんです。それからまた、非常に建築費が安い、そうして内部の方の支払いにしても、なかなか思うようにいいかないし、そういう点でちょっとデザインの点では面映いような気がするんですが、ただ今言われた建築ができあがるプロセスということを考えると今までの建築とは非常に違ったものがあると思います。

で、また本質的に建築というものは、画家が一枚の絵を描いて、それが作品として評価されるということと違って、建築自体は朝鮮大学に限らず、どんな種類の建築でも、できあがるまでに建築以前の問題があるし、プロセスが非常に重大だと思います。したがって建築が絵や彫刻と同じように作品の良し悪しだけで決定されるということは、何か少しどちらかが足りないような気がしますね。

川添 私どもメタポリズムなんて主張をやつてついですでしょう。それで新陳代謝……建築というものは完成することがありえないんで、またいつかそれを改造し低下しなければならない。

そうしてみると常にプロセスですね。たとえば一人の個人を考えてみても、オパーリンみたいな見方で河の流れの如くすべてが変つてということになれば、やはりプロセスになりますね。

したがって朝鮮大学が賞を受けた意味というのは、相当考え直してみなければいけない問題を含んでいるんじゃないかと思いますね。

山口 まあなんていいですか、今だからいってもいいのかもしれないが、あの当時土地をさがしたり、買ったり、といったような仕事が非常に困難だったんですね。ですから設計者が手をつけてきたということが、かなり違った意味があるんですね。今になってみれば政治的な意味なんかほとんど解消しているし、もう中共とも北朝鮮ともソビエトとも貿易は盛んになってるし、今ではさして問題はないだろうと思うんです。しかしあの当時としては問題があったわけです。

川添 いま土地の方が問題になったということですが、これは特殊なようにみえますが都市計画で土地問題というものがないとたいへん騒がれていますね。そんな問題にもつながってくるんじゃないかと思います。

山口 ええ、そうです。

川添 それで今のところでは土地が決まってから建築をはじめめるのですが、都市計画の本来の立場からいえば、どこに建物を建てるか、どこにどのようなものをおかれるかということが大切で、土地の設定で、すでに大方は決まってしまうですね。

日本の底辺を考えよ

山口 本当は、そこまでいかなければいけないと思います。ただ、今までは、建築家はここにこういう土地があつて、こんなにローションでこれ位の予算があつて、こういう人たちがこういう用途で使うというお膳立て、プログラムができてそれを建築家が建築に編成していくという習俗ができていたわけです。

したがって建築家というものの社会的意味とか経済的なつっこみとか、対社会的なものの考え方が非常に視野が狭くて町医者の……といういけませんが、そんな視野になりやすいくらいがあつたわけです。これがやはり建築家自体がもつとその問題をつつこんで考えていく。そして今はそのフィールドの中に入って仕事をしてゆこ

うという意欲がなければ、私はいけないと思います。

川添 ですからそういう土地取得のなかでも、特にたいへん難しい問題だった朝鮮大学を山口さんがやられて、しかもそれが成功されたということは大いに都市計画なんかやろうとしている建築家たちに勇気を与えたんじゃないかと思いますが。

微粒子企業を建築家がどう扱うか

山口 それからもうひとつは、朝鮮大学とは別に考えて、まあメタボリズムのつまり都市計画のいき方とか、なんとかいうことは、私は全然否定しないし、そこで非常に新しい存在的意義があると思います。それとは別に今、非常に零細な内職がありますね。例えばアメリカ向けのデコレーション、それから愛知の知多半島、瀬戸、あの辺の陶器の問題、そしてクリスマスの豆電球、セルロイド、ブリキのオモチャなど。このようなアメリカ向け、ヨーロッパ向けの内職が全部大工場で作るのでなしに、本当の日本の底辺といいますかスラムの中で作られているということです。そうしてそれが隣りのおばあちゃんとうちの娘との人間的交流とか、あるいはおじいちゃんとおばあちゃん、小学にから子供が帰ってきて手伝う、そういうような非常に前近代的な結びつきからそういうものが出来てきているわけですね。それがスラムの特徴でもあるんだと思います。だから非常に安いし、向うも買いに来て、バイヤーが買いたたくわけです。神戸なんかでいえば、模造真珠の首飾りですが、そのようなものは皆、零細な微粒的企業といえますかそんなことから成り立っているでしょう。それがスラムとしての集団のなかで互いに窓を開ければすぐおばあちゃんが顔を出す。こういう所でできあがる。これは非常に日本的だと思います。

そこでこれは、今まではよかったんだけど、だんだん矛盾が出てきて、そしてセルロイドは非常に危いし、木造の堀っ立て小屋ではポツと燃えてしまう製品の性質によっては、劇薬がタルの中にたまっていたり、そこに小さな子供がウロチョロしたり、非常に危い。危険とか、そんなこともある。また経済的に集団の団結をしなければ、自分達の生活が益々底辺の方に沈んでいってしまう。いわゆる本当に生きる、一番究極のところから這いあがるために、団結しなければならない。で、それが一つのグループに団結して、それじゃあ私達はだめだから、千葉県のどこに集団で行こうとか、あるいは、このおいた問題になって品川の豆電気の集団的なあれ。こんな問題が今後起ってくると思うんですよ。

川添 最近問題になっている中小企業合同のあれですね。

山口 ええ、それが中小企業でなくて微粒子企業で、企業になってないと思うんだね。そういうものが社会的現象として日本の特徴として出てくるわけです。それを建築家がどのように扱うかという問題です。さまざまな考え方があってと思いますし、また建築家が是非考えなければならないことだと思いますね。

ヨーロッパ、あるいはアメリカの建築家が考えている都

市計画というもの、それに最近行なわれているのかどうか、私雑誌で読んだのですが、サクラメントのスラム街の改造、あれは建築家が生命保険会社と提携して、保険会社が金を出しているのか、そのようなことでやっていますね。

日本独自の建築家のフィールド

日本の場合、そういうものと異った日本独自の建築家のフィールドがあるような気がするんですよ。何も社会主義的な意味とか資本主義的な意味ではなしに。日本人が生きる上に建築家がどこでどういうふうに参加するかということね、それが非常に大きな問題としてクローズアップされてきているんじゃないかと思います。

川添 実は、私も生産性本部の方からそういうことを少し相談を受けたりしたんですが、そのようなことをした建築家はいないかということだったので、おそらく、それは山口先生しかないんじゃないかといったんです。枚方でしたか、あそこで既製の団地といいますか、都市計画をおやりになりましたね。それは既製ですから微粒子ほどまではいかないと思いますが、そうしたひとつのいき方でやっておられるということをお話したんです。そういうことも私、高く評価しなければならない問題じゃないか

と思っております。

それから、いま都市計画で、日本的ないき方があるんじゃないかとおっしゃりましたが、これは私、大いに賛成だと思います。で、実は私共のメタボリズムの考え方もそこにあるので、そのひとつは東京が気狂い部落だと誰もがいうわけですね。そこで考えてみますと、東京というものはロンドンとかニューヨークとかパリ、そういう都市が持つてるところの都市装備を持っていないんですね。

それが人口が一千万になるまで、大した問題は起きなかったということは、何か考えてみなければならないことがあるんじゃないですか。気狂い部落といってもこれは天才と紙一重みたいな要素があるんじゃないか。それは特殊な中小企業というか、微粒的なものが非常にあって先ほどのヨーロッパ、アメリカ的なスラムクリアランスということをいわれましたが、これは向うでも大へん問題になっているんですね。

というのは、先ほどの話のように、おばあちゃんとかおじいちゃんとか、その中でもコミュニケーションが非常によくできている。それで都市のいいところは情報量が多いということなんですね。それがスラムクリアランスしてしまつとアパートの個室に入って、そういう情報量がなくなってくる。そうすると非行少年とかいろいろな犯罪が増える。そういうことが社会的に確認されている。すると、スラムの持つてに在る良さを近代的に再発見しなければならぬ。そういうことを考えているのですが、例えば日本の工業の中で、世界で非常に優秀な電子工業ですとか電子工業というものは、プロセス工業と違ってアッセンブリ工業ですが、プロセス工業ですと近代的に一列に並んだ流れ作業の組織をもっている。

アッセンブリ工業というのは、スラム的な形があるんじゃないですか。そうすると一列横隊とかそういうことが近代的だと考えられていたけれども電子光学みたいに超近代的になると、一見ランダムみたいに見えるけれども、そこに新しいコミュニケーションシステムが都市計画的に考えられるので、そういうところから人間的であって、しかも近代的な都市計画のメソッドというもののかおり得るんじゃないか。

本当の意味でのヒューマンスケールを

やはり中小企業団地……スラムを近代化していく方法の中に見つけられそうだと考えています。これは日本が世界に冠たる伝統を持ってるから、日本の建築家が見つけ出す問題ではないかと……。

山口 そうだと思います。例えば江戸時代あたりの八っあん熊さんの出てくるあのハモニカ長屋のエネルギーといいますか、あのものの考え方は、政治的意味での非常にヒューマンスケールといいますか、そういったようなものが、こまかく日本的にまとまってきている。

それが今のスラムのなかにまだ残ってるわけです。本所とか深川とか浅草とかそういうんですね。さらに大阪にいけば東区の生田ですね、神戸の方は垂水の方に残ってるわけです。そういうものは、つまりヨーロッパと違ったものであるということを、痛切に感じないと都市計画が失敗すると思います。

都市計画にしろ団地計画にしろ、人間をただ重ねて鳩小屋みたいに入れていくということの考え方は、これが失敗する原因じゃないかと思うんです。やはり機械的でなくて、本当の意味でのヒューマンスケールというもので考えてみて、空間的にも精神的にも、それで団地計画をしていかなければならないと思うんですが。

川添 なんとというか、“もの見高いは江戸の華”とかいって、ケンカがあると皆、わっと出て来る。そういうことは都市の芦原さんの言葉でいえば外部空間があるということですね。

山口 そうですね。

川添 それが武家屋敷になると、塀で囲まれた外部空間になって、仕切り強盗があってもわからない。声をあげても近所の人は聞こえていても出てこない。そういうところは、都市外部空間があるとはいえないですね。そうすると釜ヶ崎事件とか、あの場合大へん悪い形で出てきたけれども、やはりあれには町の中でひとつのコミュニティを作っておりましてね。だからほかの人が入ってくると、自分の庭を荒らされているような感じになる。そういう悪い面が出てきたけれども、むしろ裏側のいい面ですね。そのなかではひとつのまとまったコミュニティがあるわけで。

都市計画を発展させるためにも

山口 私もそう思うんですよ。釜ヶ崎事件とか山谷事件というものは、ほんのちょっとしたモーメントで、ひっく

り返ったんで、あそこに住んでいる人間の善意というのは、ロマンチズムとか感傷、センチメンタリズムの、見ていて人間的な連中がいるわけですよ。

それは私自身が小さい時から、あの連中の考え方をよく知っていますし、だから今の山谷なんかというものを、いま東京都でビルを建てて、そこに住ませるとか何とか、親心といいますか、役人の方でいろいろやっているようですけれどもね。そんなことをしたってあの連中そこに住みませんよ。彼等は特殊な考えを持ってるから。それがいわゆる下町のいわゆるグレントになる……基礎になる考え方なんてすね。山谷の連中の考え方が一応経済的に恵まれたり、人間的に自分の部屋を持つようになったりして、いくら

か発展したのがつまりスラム街であり、さっきいったスラムの人間的なコミュニケーションなんです。ですからあれは否定できないと思うし、あれが非常に日本的ですね。「どん底」を見ると、いちばん初めの舞台面をみても、非常によくわかるんです。ただ問題はロシアのああいふ底辺と日本の底辺というものは成り立ちが違うから、ロシアはツアー時代にもものすごく、それでああいふふうになっちゃった。

日本のいわゆる封建的ないき方は、もちろん支配階級の社会であったけれどもしかし、ロシアのツアー時代ほどの物理的な圧迫というものは、そんなに下町になかったと思います。だからその「どん底」のなかの一場面での印象と山谷や釜ヶ崎からの印象のうけ方は違ってくる。釜ヶ崎も山谷も非常に楽天的です。「どん底」からみても私はそう思います。

なにか非常に日本の都市計画というものは特殊な考え方をしていかなないとまずいんじゃないかと思うんです。

川添 私も全く賛成です。

山口 それでこんどは芦原先生が、都市計画の本を書いておられますが、あれはもっと発展して、芦原先生自体が非常に下町的な人だし、ですから私は大いに我々と共通したものがそこから出て来るような気がして、楽しみなんです。それを続けてもらいたいです。とにかく自分の理論体系を作ることであの本を一生懸命やっておられるけれども、これから本当に芦原先生の生活体験が出てくる。そういうものが非常に貴重だと思うんです。とても期待しているんですよ。やはり芦原先生の人間の形成からくるのかな。

川添 それは芦原先生だけでなく、山口先生ご自身が先ほどおっしゃられたように江戸っ子ですね。浅草の生まれで、日本には市民的な伝統はないなんてよくいわれますが、とんでもないことで、そういう市民的なものがあつた江戸なんて世界一の人口をもつ都市だったのですからね。長い歴史をもつ京都でもそうで、そういうところに市民の伝統がないなんて、馬鹿な話はないんでそういうことを発掘しなければならない。

ところが我々発掘というけれども、山口先生なんか、生活で身についておられるんです。山口先生の身についた市民意識が分離派から創宇社の近代建築運動のいわば先駆者になられたひとつのバックボーンがあつたん

ではないかと思うのです。

反骨精神を身につけて

山口 そうですかね。つまり昔の政治に対して市民の狂歌が出ていますでしょう。辻々に貼り出して、ああいったような一部の反骨精神、これは点線かな、ずっと連つた。あれはマッスになった反抗ではなしに点線の江戸庶民の反抗、反骨といいますかそういうものは、私、身につけてると思うんですけども、私自体の欠陥としては、それを体系的にマッスとしてワッと造りあげていくという力がまだ無かったような気がして、それが残念なんですよ。

私はもつ。と、それを点線的な反骨でなしに、連つたマッスとしての反骨で、いってみればヨーロッパ的な意味での反骨で出して欲しかったような……と今になって反省してみるとそう思うんです。

川添 しかし、それは時代だったともいえるんじゃないでしょうか。例えば、さきほどの中小企業か……：微粒子企業ですか、今まではそれでよかった。

したがって、そういった反骨精神の上に立っていた近代建築運動も今まではそれでよかったといえるのではないのでしょうか。それで山口先生が今そういうことで反省されているとすれば、中小企業合同などの問題が起きてきていることの反映じゃないか、それでRIAの組織も、おそらく、そういう反省から出てこれたのではないかと思うんですが。

山口 ええ、そうですね。

RIAの組織について

川添 で、そのRIAの組織について少しお伺いしたいんですが。

山口 まあ、これは難しいですがね、RIAの組織というのは、私は個人の建築設計事務所をやった場合に、私の所で働いていた人が、ある年令に達すると実力や社会的地位が出てくるわけです。するとその人が活躍のチャンスが出て来てひとつまとまったものを獲得すると、その建築事務所から離れて、今度は自分がボスになろうとする。いわゆる建築事務所のボスになるわけですね。また、そのボスになった建築家からまた若い人がボスになって別れていくわけです。そういう具合で離れていくわけですが、そうしますと建築というものは、本当に育たないという気がするんです。そんな気が十何年、自分で設計事務所をやってみて、痛切に感ずるわけですね。

それは感情的な意味があってその人が別れていくのではなしに、そういった必然的な意味で別れていくんですね。で、その別れていった人が育つかというと、その人は痩せていくんです。いつの間にかタレントがあるなにかかわらず、おそらくないのかも知れない。あれば偉くなるんだけど、そんな人はあまりいませんから、それで痩せていつの間にか消えていくわけですね。

それから、建築の雑誌によく住宅とか小さいビルディ

ングとか非常に意欲的な作品が発表されますね。それはあまり聞いたことはないけれども、よく調べてみると、どここの事務所にいる人とかでその人はサイドワークでやってるために時間が少ないし、だんだん作品ひとつに集中することができなくなってくるわけですね。仕事はだんだん増えてきますから次第に仕事は荒れてきて、そして痩せていくわけです。いつの間にかジャーナリズムから消えていくということが、かなりあったわけです。

それは川添さんもよくご存知でしょうが、私はやはり変則だと思うんです。私自身の体験からいっても、これではいけないという感じがしたわけです。それで私も非常に経済的に困り、建築事務所は解散していろいろなことを考え、これではいけないから新しい組織で新しい建築家と仕事をしていきたいと。それにはどうすればいいかと、懸命に考え、結局ひとつのグループとして建築を造ってこういう結論に達したわけです。

そのやり方が問題ですけど、まず、グループでやるオリエンテーションが決まったわけですよ。じゃ、そこで、それをどういうふうにやったらいいか、これは難しい問題でしたけれども、今年で大体十年目になりますか、まだそれはまとまっていませんけれども。しかし一懸の成果は出てきていると思います。

痩せて衰弱する危険

例えばヨーロッパの建築家コルビュジエとかライトとかいう人は特殊な人だと思うんです。いわゆる天才ですね。個人で自分のアイディアをあくまでも前面に出し、そして衰弱しないで益々太っている。まあピカソ、マチスみたいな人と共通なものがライトなり、コルビュジエに考えられるんです。グループの人はずい分衰弱してきてる。これは異なった意味ですけども、日本、ヨーロッパでもなかなかそういった人はいないと思います。

これは個人でものを考えたり、仕事をしていくことは、画家や彫刻家の場合、あるいは文学の場合は、そういうことでいいと思いますが、建築家の場合、やはりそういういき方は、どんどん痩せていくんじゃないかと。

ともあれ共同作業の多い仕事だし、範囲もだんだん広くなってくるし、やはりそこにはグループ制のタレントが集まって、ひとつの建築をなしとげる。ということが本当じゃないか。それにもうひとつ、画家は大丈夫だ、彫刻家は特殊だといったけれども、やはり文学にしたって志賀直哉が暗夜行路を書いた以後、何も書いてない。志賀直哉は昔二十年前に書いた仕事の貯蓄によって、現在の志賀直哉の名声を保っている。あれになる危険がある。それから安井曾太郎先生に、私は絵を教わったり、非常に個人的にも世話になった恩人ですけども、安井先生が亡くなる十年ばかりの間の作品は、油気がなくなってきた、昔の艶々しさがなくなってきた。それに日本の画家が年をとると油絵ではなくて墨絵を描き始めるそれも一種の衰弱だと思いますね。

それは、建築家には、もっと顕著に現われてくるような気がするんです。建築家で名前をいうと困るが、そういう

建築家がいる。そして、その建築家はだんだん袋小路に入ってもやって、コチコチになっても動きがとれなくなる。昔は非常にいいデザインをして、デザインそのものはいいいんだけど、すぐコチコチになって発展性がなくなる。このような建築家が多いようですね。

やはり設計のプロセスといいますか、設計の本質から考えていかなければならないと思うんです。そんな意味でRIAの若い人たち、こういう若い優秀なタレントと一緒に仕事できるということは非常に幸いだと思えます。

袋小路に入りそうになると、叱られてまた反ってくる。若い人たちからエネルギーを吸収して、私自身も発展していくんです。したがって、私のオリジナリティというものが皆んなの力で支えられてきてるわけです。だから個人的には非常に弱い、特徴のない地味なデザインになってくるんですが、それなりにRIAのスタイルなり、味というものは、今後出てくると思います。

この十年辛抱してきた甲斐があって、十年後には、もつと味が出てくるんじゃないか。それはアマチュアの味ではなしに、張りきった若い人の華々しい作品はまだアマチュアの作品だと私は思うんですが、そういうものでなしに、いわゆるプロの渋い味を……。

川添 噛みしめれば噛みしめるほど出るその……。

山口 ええ、そういう味を出していくような気がするんです。RIAというのは発展していくと思います。

まあ、自分でいうのはおかしいけれどもいい協力者が育ってきたと思って、その点非常に誇らしいし嬉しいですね。

今、二十一～二人いますが、入所する時、いろいろ詮衡し合ったり、難しいことを話し合ってみたり、話しをしない人も、いつの間にか同化して非常にいい人に育っている。なんといいですか、協力というか、みんなの気持がひとつになって進んでいますし、やはり嬉しい。

川添 私は植田さんにしても三輪さんにしても近藤さん、いずれも堂々と一軒の事務所を構えられるくらいの実力を持っていると思うんですが。

山口 私も、そう思うんです。

その具体的な方法

川添 それで、その優秀な方々と十年間苦労されて、具体的にどういう組織形体、方法で共同作業をやられるかということです。

山口 例えば、今、真山美保さんの演劇センターというものをやっているんですが、そこは八王子の郊外で、とてもいいところなんです。それは美保さんからうちへ話がありましてね、同じものの考え方、社会的なものの考え方が美保さんと私が同じ方向なものですから、そうなったんでしょう。話のあった時、向うはRIAなり山口に頼めば、こういうものができるかも知れないというイメージを持ってるんですね。

オーナーとしても、私の方としても、美保さんの仕事というものを深く理解しているわけですよ。彼女の仕事が

都会中心ではなしに、いつでも地方に廻っている。そして農民、労働者、高等学校の生徒、あるいは女工さんだとか、そういう中で自分の演劇の仕事を発展させていく考えでしょう。そういうことを考えますと、必然的にその舞台というものは、現在建設中の日生劇場のような非常に都会的なエッセンスで、メカニックな舞台装置をして、スポットなり、演出なり、都会でなければできないというもので、あの劇場を一步でもはずれたら、名古屋でもできないし、少し小さいところでは全然できない。そういう演劇形式でないいき方をやってる美保さんの考え方はわかりますね。

そこで、その演劇センターに対するイメージが、建築家として出てくる。私だけでなしに、この十年間の積み重ねの間に三輪君なり、植田君、近藤君なり、みなうちのグループ全部が理解するわけですよ。それで現場を見てもらいたいというので敷地を私と五、六人で一緒に見に行って、向こうで共にお茶を飲んだり、お寿司を食べたり、現場をぐるぐるまわって雑談して帰ったんです。それから第一段階のスケッチを出そうということでその時、それぞれの案をディスカッションに臨むわけです。つまり、どういう方向で進めるかということを相談した。そうすると、みんな真山美保さんの劇団への理解のしかたが似てるわけですね。

それで、四、五人の連中がイメージを持って、一週間後に二階の設計の部屋でみんな持ち寄ってそれを見るわけです。

すると一応、異ったところがあって、持ち寄った案を基本に、ディスカッションして、これはこの方がいいとか、アプローチはこうの方がいいとか、いろいろなプランニングの構造の問題について、表現の問題について、工費の問題について、そういう方面から一番適当なスケッチが固まるわけですね。ですからその中心にディスカッションされた人が、一応その担当になるわけです。こんどは近藤君が中心ですけども。

案ができあがると模型ができて、建築の素人がわかるようなものを作って、相手に見せて意見を聞く。それから、またディスカッションをして、だんだんプランを固めていくわけです。今、大体四回～五回のディスカッションを重ねてきています。(次号)

週刊 建設ニュース 41—6月第3週
昭和37年6月18日発行(毎月曜日発行)通巻第40号

対談 (第2回)建築家の姿勢

演劇センターの設計は

川添 ところで、これは建築からすこし離れるんですが、私は一時幼稚園のことを勉強していましたでしょう。保育園なんかですと、入った子供は三年以上いるわけで

すね。そうすると長くいればいるほど厭きちやうんですね。

というのは一年経つとまた同じことをやらねばならない。それでどこの保育所でも困って民主保育連盟の人たちが、いろいろ研究されて、グループを作って、去年いた子供が中心になって同じことをするにも一段高いことをやる組織を作ったわけです。つまり何というんですか、グループの伝統を作っていくと、同じことをしながらも、その保育所が十年経ちますとムードの違った保育ができるという、メリードを民主保育連盟の人が築き上げていったんです。

共同設計といっても、機械的な共同設計ではなくて、むしろRIAの伝統というか、むしろグループの個性を築き上げていく……。

山口 そういうことはですね、まず方向づけが第一ですよ。それは八王子の演劇センターの建築敷地ということ考えた場合、あそこに都会的なビルディングを建てるべきじゃないということが、まず第一なんです。

それから独身寮とか家族寮というものは、あそこに百三十人の団員がいますから、それが年中地方に行って、また帰って来る。そこで百四十人くらいの個室なりを使用することができなければいけない。それで公団式のいわゆる会社の寮的なビルではいけない。土地自体の形からいっても、それはいけないということがまず設定される。

だから平屋でべたべたと並んだような形になったけれども、劇場自体もですね舞台のメカニックなんか、そんなに心配しないで、見る側とか音響を考える。八王子というところは、弾丸道路ですか、ハイウェイの起点になるんでしょう。起点はともあれ、あの辺は相当発展する。そうすれば車で八王子から十五分～二十分のところだけでも、いずれ町ができてくるんじゃないですか。

すると演劇センターのオールドリームというものは、劇団だけの問題じゃなくて、もっと公開しなければならない可能性が出てくるのではないですか。都市計画的にいろいろ八王子の団地をみて考えるわけです。これをリジッドな劇場にしましては困るし、都市計画の方向とか増築の問題、いろいろありますね。

川添 そうすると、今度造られる演劇センター、それも中小企業団地、そういう感じでやられるんですね。

山口 そういうことですね。

川添 そうすると、それを設計される方も、そのような組織のもとにやつておられるわけですね。

山口 ええ、そういうことです。

川添 まあ、理想的な形態ですね。

山口 ええ、だからずっとまえに、前進座ですね、あれを平松君がやったんですけれども、あの時の考え方と、劇団自体の組織が違うし、異ったものができるんですよ。今度の場合は、案が固まっていけないということでまだ発表できないところもあります、面白いというか羨しいオーナーだし、建物もそうだと思うんです。

川添 それで、ここの事務所の内部だけではなく、構造とか設備とか、あるいは都市計画なんかの場合に社

会学者の参加も求めなければなりませんね。枚方の場合もそうですか。そういう場合はどういうふうに……。

山口 枚方は、市立大学の川名先生、あの先生の研究室で人体考えているんです。それから水谷君が川名教授と一緒にやってくれている。ですから我々と川名研究室と合同でやっている、そういう意味ですね。また、ほんのものも、これからは、そうならなければいけないと思うんです。建築家自身がやったら大変な間違いが起こるのではないかと思うんです。 y

その意味で私の知っている東大、土木の先生ですね、そういう人たちの参加も求めなければいけないし、それから社会学研究所の所長、遠藤という人がいますね。東大の教授になったかな、彼を中学時代から知ってるんですが、とにかく彼のところへも相談に行くつもりですがね。

建築家協会に苦言

川添 山口先生は今、建築家協会に入っておられますか。

山口 入っています。ただ出て行かないということです。出て行っても面白くないから。

川添 どういう点が面白くないんですか。

山口 ゴルフの話ばかりでしょう。それから皆、えへらえへら顔を見合わせていい顔してるけれども、その底の方じや戦争をしてるわけです。ことに今年の宮崎市庁舎コンペの問題。ああいうことはほんの氷山の一角であって、実際はもっと見苦しい面があるわけでしょう。

だから建築家協会というものは、もっと抜本的に全体が考えていかなければいけないですよ。それをただ、えへらえへらで、すましている。私は非常に残念だと思うんです。今度は、坂倉君が委員長かなんかになったものだから、たまたま彼の正義感というものが爆発して宮崎市のあれに参加した建築事務所三者に対して非常に強硬な意見を出したわけなんですね。私は大いに賛成しています。あのようなことはもっと強力に進めていかなければいけないと思います。また坂倉君からこそやれたのでしょうが、これからはすすんで坂倉君のような気持をみんな持って会員全体がやれば、建築家のモラルも上っていくでしょう。さらに社会的信用も上ると思います。

今のままでは請負会社から馬鹿にされるばかりだし、それでは建築家に技術的向上も何もないと思うんです。

大資本に対応して行くために

もう一つは、この頃は、建築家のデザインの問題だけではなく、大きな請負会社は、立派な研究所を持っていて、そういう研究機関というものを大きな資本で進めているが、これに建築家自体が負けちやいかんと思います。

それに、よほど気をつけなければ、建築事務所自体が非常に老いてしまうのじゃあないかと思います。

だから建築家協会も、そういうものに対応して、グループとしてどうしたらいいだろうかを、もつと真剣に考えねばいけません。

医学の方士云えば、大学なり、研究所とかが、政府または、公共の資本で大きくやっていて、町医者はそのものに飛ばされているようなものです。

それが建築では、大きな請負会社にどんどん押されてしまうわけです。

協会員全体が協力しなければ

また、それは学問的にもいろんな意味で、そういうことを考えていかなければ取残されてしまう。従って、コンペティションの問題を日本建築家協会がいくら表面に押し出してみても、そういうことを聞かない人がたくさんいるし、抜駆けの功名をしたりして今度の設計のようなああいとおかしなことになる可能性が出てきます。それは、結局、建築家協会自体が、もう少し考えていかなければ、協会だけでなく、協会員全体が考えなければ駄目だと思います。

川添 そうすると、請負の設計部なんかも強力になってくる可能性も……

山口 ええ、ありますね。

川添 村松君なんかの、それでどっちか本命なのかという考え方もあるわけですね。

山口 ええ。

川添 そういうものについては、今迄色々検討されてきましたが、山口先生はどういう風に考えておられますか。

山口 それは、感情的には、そうなりたくありませんよ。請負人の事務所が発展して、われわれ個人的な事務所が衰弱していくということは、堪えられないことですよ。

しかし、現在のままでは、おそらく必然的にそうなるんじゃないですか、例えば今日の新聞なんかを見ますと、日本プレハブ会社というものが出来たでしょう。あれは、富士製鉄とか、小野田セメントとか、昭和電工ですか、そういう大きな会社の大資本でこしらえている会社ですよ。そうして一年間に四千戸の住宅をこしらえていくということでしょう。

あれには、アーキテクトというんでなしに、エンジニアの人が参加しているわけですよ。それが長年の間に、生産の技術と、資本の強さということで、あれを発展させていくわけでしょう。そうするとビルディングを工場生産でこしらえていく会社もでてくる。

プレハブをめぐる

川添 ですから、例えば、浜口さんでも、村松さんでも、ほかの自動車とか、そういうのが、そうだから、建築もこうなる可能性があるというんですが、プレハブだったらそういう可能性が出て来ます。でも、請負会社というものは、

労働者とか、生産工場という実態を持っている形じゃないですね。徹頭徹尾サービスです。

そういうものと、プレハブ会社とかいっしょにするのはどうも。

山口 いや、勿論そうなんでしょうが請負会社は、施工部門と、設計部門を持っていますね。その設計部門について考えてるわけで、プレハブ会社の建築エンジニアの仕事が、そういう風に発展していきますね。

すると、個人の建築事務所のフィールドは、それだけせばめられてくるわけです。それから、プレハブ会社が、ビルディングをやった場合も、それだけアーキテクトの建築事務所のフィールドがせばめられてくる。それと同じように、請負会社の設計部も、性格は違うが、やはりわれわれのフィールドにのり込んでくるわけです。これは、必然的だと思います。両方から浸透してるわけです。

それはつまり、建築会社の設計部のなかには、テクニカルアプローチといいますか、そういうものの、キャリアのある人が多くいるわけです。従って、デザインは少しまわずくても、雨の漏らない家、屋根の飛ばない家をこしらえる組織ができています。

ところで、新しい建築事務所は、大將が、三十いくつかですね。だからそこで働いている人は、そういう問題が非常に弱いわけです。そういう点でも、やはり私はせばめられてくると思います。

結局、そのデザインでしゃやれたフアッションモードみたいなデザインをすることで逃げてしまうのでは、それは建築家の仕事でなくなる。つまり本当の仕事をするとなると、その辺で接触する可能性が生まれ、スパークすることもあり、それでどちらが勝つかということになると、予断を許さないと思います。

川添 でも、日本プレハブの場合は、大高君、菊竹君、黒川君など、フリーの建築家も参加して設計していますね。ですから一概に云えないと思います。

あの仕事ですが、そういう生産会社の場合は、例えば、自動車のデザインなんか、はじめから技術的な問題が設計に反映していく。それは、機能そのものは、工場の技術者が、にぎっているからですね。

だからプレハブ会社になると、それに近くなりますが、建築の施工会社の場合は、機能というものは、人間の生活なんてすね。それに、請負の現場は、自動車や、テレビや、洗濯機が持つてゐるほどの必然性は、稀薄だと思います。だから、むしろ、施工会社などが持つてゐる技術的なテクニックは、仕上りの、構造の原理からやってくるほどの蓄積は、まだもっていないわけですよ。

私も、民開の建築家の苦労が段々わかりかけてきたのは独立してからですが、一本立ちちというものは、そうした大企業に在るのと、一人で在るのと、どれだけ条件が違うかということを常に感じてきたわけですが、若しそういうことがいえるとなると、今おっしゃったような新聞社やなんかが持つてゐる機能に、到底、僕等は、対抗出来ない。発言するには、調査なくして発言するなかれというコミュニケーションシステムから、新聞社というものは、圧倒的なものを持っています。すると、そんな人達の力

の前に、僕らなんか押しつぶされちゃうかというと必ずしも、そうじゃない。

山口 それはね。川添さんの仕事とレウものは、言ってみれば、ペン一本でいいんです。つまり学者の仕事と同じですよ。だから建築家の仕事とは、ちょっと違うと思いますが。

川添 ええ、違うと思います。その違い方が、例えば、自動車とか、電気冷蔵庫と、建築の違いです。僕らはどちらともいえない、そういう考え方です。

山口 そうかな…

川添 少なくとも先程のヒューマンスケールといいますか非常に日本的なものなんですね。ベルトに乗っかるような近代化でなく、別の近代化で、そういう問題を扱えることを発想できたり、メスを入れたりできるのは、むしろ建築事務所のなかでの中小企業団地みたいな……

例えば、大高君や、菊竹君たちが、都市計画をやる場合、一つの事務所では出来ないような、そういうところを、事務所同士が、どう関連づけてやっていくかを盛んに問題にしようとしているんです。

先程いわれたようにRIAには、RIAの伝統みたいな集団の個性がある。それが、請負の設計みたいな大きな規模になって、集団としての伝統が、組織とかその時の人間の性格をおう問題として出てくる。それを山口先生が、そうおっしゃられるんだと、僕らも一寸考えなくちゃいけませんね。(笑)

山口 それは、日建なんかの設計部は一応、グループ単位で仕事をしているでしょう。だから、班長というものの個性が現われてきますね。林君なら林君が一つの班長としてやった場合は、林君の個性が出る。二見君なら二見君の個性が出る。然し、日建のクオリシティのあるそういったオリジナリティではないと思います。

それと同じようなことは、請負会社の大きな組織では、例えば、大熊君の担当した住宅とか、だれだれの担当した住宅…。清水建設のなら清水建設のだれだれということかあります。

例えば、赤坂に「ミカド」なんてくだらない建築ができましたね。あれはU君が担当しているわけでしょう。そうするとUという建築家のああいいうオリジナリティ……芝公園の中華料理屋もそうですね。つまりああいいうものが個性をもって現われてきてるんですよ。それは、清水建設の最大公約数的な表現ではなくてUならUという人間の表現だと思うのです。つまり、ああいいうものもあり得るので、清水建設のグループグループのなかでやる人間によって違ってくるわけですよ。

川添 で、そういうことが、清水建設とか、日建とか、…日建は請負じゃないから一寸違うかも知れませんが、許されるのは、先程言われたような問題からすると、本来ならば、もっと無性格的なアマニマスなデザイン……そういう意味で自動車のデザインが非常にいいアマニマスのものが出てくるのが本質でしょう。

にも関わらず、そんな個性が許されるのは、やはり、建築の持っている本質がそこに反映していくのでしょう。

建築のもっている本質

山口 うん、私は、それは、二つあると思うんですよ。

つまりいま言った自由だとか、理想化といった物の考え方の建築が、請負会社の技術的な研究が発展していけば、組織としてもそうなる。

又、一方には、Uのような人がいて、そういうオリジナリティのあるものができてくる。

その二つあると思うんですよ。しかしその二つある中でも、「ミカド」のデザインを裏づけているものは、やはり、清水建設の研究所の材料研究なり、構造の研究なりが出ており、その強みがどこかにあるとすれば、それは、やはり請負会社の強みだと思います。

従って、民間の小さな建築事務所で、Uのような人が始めたとしても、あれだけのステージのメカニクは考えられないこともあろうし、材料についても、個人では、あんなにできないんじゃないかという気がするんですね。

だから請負会社の設計部や研究所という背景があってそういうものができ上ったと。それは、まあ本質論に入ることになるんだが。

経済面の悲観的材料

今一つ、一応、建築設計事務所の経済的な面の悲観的材料として、これは請負会社にもいえることですが、丸紅や、東綿、伊藤忠とかの多角経営の大資本が関西に現われて、土地があつて建物ができない人たちに、その土地を担保にして設計も、請負も、材料も全部引き受ける。また、銀行利子より高い利子をとって、建築資金も全部貸し、設計は下請させる…東綿なり、丸紅なりには専門家は一人いますが、とにかく下請させています。然も、その事務所は、プランと構造ぐらいのもので、冷暖房の設計になると、今度は、冷暖房の会社にやらせる。

また、請負のほうに見積らせ自分の方のマーゲンをとり、自分の名前で仕事をする。つまり揺籠から墓場まで、始めから出来上るまで、丸紅なら丸紅で仕切ってしまう。それで金利と、マーゲンの両方をとって全て下請にやらしてしまう。そういう方法が、近年非常に盛んになっている。

これは、請負も下請行為をするため、次第にその組織の中にのまれていくわけです。勿論、建主も随分損をしますが、まあ、仕方がないからやる。設計事務所も、請負も、材料屋も、皆んな吸収されていくわけです。既に、東京でも、大阪でも、相当のところ、吸収されて下請をやっております。

私のところも、一足突込んで、危いところで喧嘩をしてやめたのがあります。Kビルというのですが、M商社から頼まれたものです。そういう風にどんどん事務所ものまれてしまう。それが、益々発展していく可能性があります。

川添 だけど、それは、必ずしも吸収されるとは限らないんじゃないやありませんか(笑)つまりベルトのラインみたいなものの中にいてそれに個性がどんどん吞まれてしまう

と、本質的には非個性的なものになってくる。それは、先程の「ミカド」でも、个性的かという点、むしろ逆なんですよね(笑)非常にコマーシャリズムというほうのあれで、むしろ神代さんなんかには言わせると無国籍的な建築の代表的なものということで、ですから、それが非常にコマーシャリズムで一眼強力な個性的なものが出来たようでも、それはむしろ非個性的なもので、それでなければ、もっと健康的なものでは、アマニマスーデザインだと思うのです。

しかし、そういったことに対する当然人間の内部の中で反対みたいなものがあります。その一つの証拠……証拠といえるかどうか知りませんが、デパートなんかは、百貨店法という法的な措置があったからかも知れませんが、…名店街もあるでしょう。それでヨーロッパでは、デパートなんか老舗みたいなものがさうとう強く残っているような問題がある。

ベルトに巻きこまれるか

それからもう一つ、組織それ自体の中で、生産のラインの中に全てが入っていくと、大將みたいなものには、情報が全部集まる。若し、これが、真空管とすれば、その真空管が壊れると、ラインの中から頭脳的なものをはずさうという、頭脳的なものをラインの外に出さうという動きが、最近できている。従って、一方では、コンサルタントを利用し始めてコンサルタントが繁昌してるわけです。

そういったラインから外さうという技術革新の中でやっていることは、そういう機械的ラインから人間の個性を、如何にはずしていくかという操作だろうと思います。すると、むしろRIAみたいな個性的な伝統を持った事務所というのがラインの外側にいて、そのラインの外側の個性と技術革新の流れにいる大きなラインと、如何に結びつけられるかという問題じゃないかと思います。

従って、むしろ完全に巻き込まれるものじゃないと思うんですが。

山口 巻き込まれるのではなく、現実的に仕事が無くなる可能性があるんですよ。

川添 それは、わからないな。

山口 あるんですね。

川添 それがとにかく、少なくとも現段階では、どこの事務所も、大変なウケに入ってるわけでしょう。それで、これが間に合わないで請負の設計部なんか、どんどん拡大しているんですが、これで不況になった場合は中小事務所は随分、苦境に立つでしょうが、請負やんかが、設計部といったやっかいな組織を持ち続けるかどうかは疑問に思います。竹中のような伝統あるところは別ですがね。

本誌 それは、織本さんも云っておられました。あの方は、もと請負におられましたが、その点については、同じようなことを話されてました。大きな請負の設計部においても、不況がくれば、結局首になる。つまり、企業の立場から機構を縮小していかなければならなくなる。設計

事務所も、請負と同じようなことになるじゃないかと。

山口 設計事務所が？

川添 それでJIAのほうでも、そういうことだったらフリーデザイナーなんか成立する余地は全くありませんよ。

山口 私も、JIAのメンバーですがあそこでフリーでやっている人は非常に少ない。皆んな、松下電器とか、東芝とかのデザインのバッグに入っているわけですね。いま云ったベルトコンベアの中にいるわけです。それは、一応分解してくる可能性はあるかも知れないが、デザイナーとして独立している人は、非常に少ない。

そういう意味から、建築が最終的にはどうなるか、私にはわかりませんが現在の混線状態では、かなりマンモスが現われてきて、マンモスの吸収力の強さについては、われわれはもつとも危険な段階に立たされることは、事実ですね。

川添 それは、事実です。

本誌 大変、悲観的なご意見が出ていますが、問題は、その観測に対して、それでは、どうあるべきかという、対処の仕方ですね。これは、山口先生ご自身も、お考えにならざるを得ないでしょうし、建築家協会としても、当然、その対策を検討しなければならない時期がくるんじゃないかと……

山口 もうきてると思うんです。

ベルトの中に入るか、うまいつながりか

川添 問題は、つまり、そういったベルトの中に入ったほうが、日本国民、もっと大きく云えば、人類にとって幸福な建築が出来るか、それとも、そういう民間事務所があつて、それと、ベルトとのうまい繋がりの方がいいか、その点だと思います。

山口 私は、やはり建築家が、ベルトからはずれて、独しし得る形が、一番ヒューマンであるし、そうでなければならぬし、弁証法的に云っても、大きな企業体というものは、分解してくる可能性があるですね。

私自体は、設計事務所は、独立してある低度のオリジナリティで仕事をしていき得る社会を信じて疑いませんが、かといって、目下の混乱状態では、よほどしつかりしないと、巻き込まれてしまう恐れがあると思います。

川添 その民間事務所が、やった方がいいということとは、どういうことなのでしょう。

山口 それは、今申し上げた通りですが。

本誌 つまり、オリジナリティ、或は集団の伝統といったようなものが、大きな資本力、大きな機構によって侵蝕されていくと、設計事務所は、生存権を失う危険がある。

従って、大資本力と結びついていくべきかについて……

山口 結びつくのではなくて、大資本、に吸収されちゃうんですよ。結びつくなんて資本はしませんよ。

だから、それは、先程云ったように、建築家のオリジナリティというものを認めねばならぬし、そうあるべきが本筋なのです。必然的にそうなります。

人間の業(ゴウ)といいますか、それは、今のソビエトの四十年の政策というものが一応分解しつつあり、スターリンから現在のフルシチョフに至る社会情勢の中で、反ソビエトというものでなく積極的な意味の分解を進めています。

例えば、コルホーズの問題などにしても、今迄は、うまくいってるように見えたが、やはり、人間の尊重といったような観点から色んな矛盾が起きている。そして、個人経営、個人農業というものに分解する方向に向っておりますね。これは、農業の問題ですが、文学にしても、音楽にしてもそういうことがいえます。

ハチャトリアン音楽は、色々な意味で批判されたり、反階級的とかでやられたりしたが、それが、今、また、再評価されて違った眼で見られてきている。それは、やはりハチャトリアンなりの音楽のオリジナリティが、芸術の本質に触れたものを尊重するという方向にむかいつつあるわけです。

これは、歴史的必然だと思います。

本誌 わが国のような資本主義国でもそのようなプロセスは……。

山口 必ず起ると思います。

本誌 そうすると、悲観的な……

川添 悲観的じゃないんで、注意しなければいけないということです。

山口 だから自然的にいい方向にむかうんだけど、それまでの間に、非常に大きな渦があるから、ぼやぼやしているとそこに巻き込まれ沈んでしまうので、ちゃんとした姿勢をしてなければいけないのです。

思想を持たない日本の建築家

そこで、建築家の思想というもの、そういうものが非常に必ガになりますが、今の日本の建築家には思想がないと思います。

本誌 然し、先生のその警戒的なものに対し、より現実的な方法として、建築家協会あたりで、もつと社会的なPRをなすべきだとの意見が、口癖のように出てくるわけですが、実際には、そうしたことが十分なされていないし、また、別の方法としてアフターケアのようなことで行ない、商社会社や業者の攻勢に対抗してゆけば、或る程度は、太刀打ち出来るのではありませんか。

山口 それは、枝葉の問題ですね。

川添 それから、アフター・ケアはむしろ設計の問題もあるが、施工の問題が相当あるのじゃないですか。

山口 施工の問題がありますね。

本誌 でも、施工の問題は、設計監理という面に密接に結びついている筈ですが……

山口 結びつきますよ、そこで、つまり設計監理協会の会員になっても、つまり税務署では、会員でだれがどの位のリベートを業者から取っているという調査ができているくらい、業者に対する発言権は弱いんです。アフター・ケアなんか考えているより、そういうことをしてるから工事は粗雑になるし、結局あの人の工事では雨が漏

るとかいう風になる。雨が漏ってくると、あれは現場が悪いんだとか、設計が悪いんだとかいって水掛け論になり勝ちです。

そこで、結局そうしたことは、建築家の姿勢の問題になります。姿勢というか態度の問題ですよ。ここに還元してくると思います。

本誌 姿勢の問題なんて、何か理想論めいて、なかなか……

山口 だから現実の問題として、建築家が、設計をやる場合、五十分の一なり百分の一のプランを業者に渡して、全部その設計部にやらせ、自分の印を押して、それが自分の設計であるとして、仕事をするところまでしてくるのです。

川添 そう、姿勢の問題というのは、フリーの場合は、根本的な問題だと思います。

例えば、僕などは、病氣したら一家全部で餓え死にです。国民保険なんかできていてもべらぼうに高いんです。

山口 個人ですとね。

姿勢の問題は理想論ではない

川添 そういふようなことを考えて、フリーになるのは姿勢を除けたら何んにもならないと思います。本当に。

それでも姿勢の問題は理想だなんていう人がもしいたら、それは大変な間違いで、フリーになるという時に決まっている問題なのです。

山口 とにかく、もう自分がフリーになるのは、ドアを開けて外に飛び出す時ですから、その時は、物凄い北風が吹いているのですから、どういう姿勢をとるかが、先ず問題なんですよ。

決して理想論じゃありません。

川添 今、民間業者が大変だ、人変だといっていますが、むしろウケに入っていると思います。戦前民間事務所を山口さんが築き上げた時代が、もつとたいへんだったと思いますね。

山口 たいへんだったんですよ。

川添 だからむしろ、逆にいえば、民間事務所は吸収されるんじゃないかというくらい、いまの民間事務所はさかんなんだと(笑)

山口 これは現実の問題で、決して理想論じゃないですよ。一人一人の建築家が姿勢を正さなかつたら、これはとてもだめですよ。たとえば何々市庁舎、それができるときなんかたいへんです。私の方では絶対そういうものには手を出さないことにしているんですが。

本誌 その点、松田先生なんかがいわれる建築家の質の問題になってきますね

山口 ええ、そうですよ。

本誌 質の問題を論じると、建築家協会の会員をふやすことがある程度制約されますが、建築家の立場を社会的に認識させ、裏付けをもたせるためには、法的な措置を講じなければならず、そのためには協会の会員をふやすということが、当面の目標だ。清濁あわせ飲むと

いう形で……。それから検討しても遅くないという考え方は。

川添 それは政策の問題ですね。

山口 政策の問題であって、姿勢の問題ではないでしょう。

本誌 政策の問題なんです。が。資本力に対抗する法的ななにかを作り上げてから、戦っていくということが先決ではなからうか。それなくしては烏合の衆にすぎない、という論旨なんです。

川添 だけど、法的な措置というものは、力関係が決するですね。その力を獲得する戦略のたて方として、そういう現実には力がなくて、もう請負と結託しているのを、いくらふやしてもおそらく力ではないと思うんですよ。

それでたいへん理想論みたいな、夢みたいなお話になるかも知れませんが、ヨーロッパで近代建築が成立する過程なんで、みんなこういう闘争を経てきていると思うんですよ。それは建築だけではなくて、おそらくほかの分野でもすべてそういう闘争を経てきている。

山口 それはイギリスの建築家でもそうですよ。イギリスの建築家協会というものは、非常に強力であって、人格者といいますか、モラルの高い建築家がいってそうしてイギリスの建築家協会というものは、世界的に認められているわけです。ドイツでもそうですよ。フランスでもそうです。それにはそれだけの歴史的なキャリアがあって成立してきているんです。

だからいま日本で清濁あわせ飲んでやって、実際のいものかどうか、これは非常に大きな問題だと思うんですね。それは松田先生のご意見も、たしかに政策としては、そういう考え方もあるかも知れませんが、僕らはもうおかしな噂がある会員は、全部首切っちゃった方がいいと思うんですよ。三人でも四人でも五人でも、清潔な建築家だけが、建築家協会というものを作る。

川添 それで逆に山口さんが、平気でそういうことをいわれているのはなぜかという、そういう法的処置がなくてもそれをやっているからですよ。現実にはそういうことをやっていくことによって、法的処置が決まるんで、法的処置が決まったからというものではない。

法律というものはすべて、現実にはすでにあることを裏付けるもので、つねにあとからできるんで、最初にできるものではないと思うんです。それで僕らなんかもよく原稿料の値段を申し合わせて決めようじゃないかというんですけれども、僕はそれは賛成しないんですよ。いまの段階では決めることよりも、まずそれぞれが闘う段階で、それでまた闘えば、逆に言うとそのようなきまりを作る必要もないみたいなもので(笑)

山口 まあとにかく、三人でも五人でも十人でもいいと思うんですよ。たとえば、坂倉君とか、前川君、僕とか、あるいはもつと若い人もいますよ。そういう人だけで建築家協会を、二十人でも、三十人でもいいから、成立していく方がいいと思うんですよ。

川添 それで芦原さんが、たいへん感激されていたんですけれどもね。岡山で児童科学館を設計された。そうしたらそこで県との契約書で「本契約は県と建築家だれ

それと対等の名のもとに結ばれるものである」ということが前文に書かれていたそうです。それはなぜかという前川先生があそこでやられてからですよ。

前川国男の偉さ

山口 そこだ、問題はそこなんだ。これは前川の偉さというものはそこだと思うんです。これは公開してもいいんですが、私が体が悪かったことがあるんです。そのとき、富山県の有峰というところで県営のダムをこしらえたわけですよ。そのダムの全体計画とデザインを、石井先生が私に前からの関係でもってきたわけですよ。ところが、私は体具合が悪いため現場に行けないんで、どうしたらいいだろうということになったときに、前川君を僕が推薦したんですよ。もう二十五年くらい前かな。そのとき建築家はこれ以外にないからといって推薦して、それで前川君が有峰に行って石井先生といっしょに相談して発電所をデザインしたわけですよ。

で、設計の費用はそれまできめてなかった。県の予算と石井先生の考えによってきめられた額で、それまでやってきたわけですよ。ところが前川君は正式なつまり私の三倍にのぼる設計料を請求したんですよ。前川君の父君は内務省の土木技官で石井先生の先輩なんです。偉い技官ですよ。そんな関係で前川君はまえから知っていたんですが、石井先生は「前川という男は非常に金銭にドライな男である。あんな男は技術者として自分とはじめて会った。あんなのない」と非常に憤慨されたわけですよ。そのとき僕は石井先生にこう言ったんですよ。

「それは前川が正しい。設計監理協会の……その時は設計監理協会とっていました……設計の費用はこうなんだ。それを前川は正式に先生の方へ請求している。県の方にもそうだ。私がいままでルーズだった。私自身、この前川の請求を見て、顔が赤くなるくらいだ。前川は正しい」と先生を説き伏せたんですよ。それで石井先生は憤慨しながらも設計料を前川君に払ったんですよ。

前川君はその当時、設計事務所を開いて間もない時分でしたが、はじめから彼はそういう姿勢をもっている人ですよ。いまの話なんかも、完全に建築家の態度をきちんと決めて、一步も譲らずに自分の建築家としてのオーソリティというものを非常にもっている。それで進んできた。そのために、つまり芦原君なんかあとから行って、感激するんですよ。もし前川君が、パイオニアとしてそういうことを臆せずに、建築家としてのプライドをもってやらなかったら日本のいまの建築界はどうなっているかわからんくらいですよ。その意味で私は前川君の功績というものは非常に大きいと思うんです。そうでしょう。

間違ったエリート意識

川添 ええ、ただそうすると、それがエリートだからできるというコンプレックスがあるから不思議ですよ。

山口 そうそう、コンプレックスがあるから。

川添 ところが僕なんかに言わせると鹿島建設とかあ
あいうところにいる、いわゆるサラリーマンこそ、ほんとう
のエリートだと思うんですよ。僕とか、前川さんでもそうだ
と思うんですが、ほんとうに中小企業で、なんにも頼りに
すらものはないわけですから。一方、請負の組織のなか
には、いわば個人の名前が組織の名前にかくれるのは
当然で、それがエリートでなくて、ちょっと名前が知られ
たらもうエリートであるというような、そういう雰囲気がある
でしょう。それがたいへんおかしい。

山口 そうです。前川君が、建築設計事務所の経
営に大きなひびがはいるかもしれない危険をおかして
がんばった、それはエリートの意識じゃないですよ。

川添 そうです。

山口 ところが、僕らは気が弱いからそういうことになっ
てくると、前川君ほどががんばれない。まけてくれといわれ
ると、もしこの仕事だめになったら困るということが意
識の底にありますね。だからそれじゃあ少し考えましょ
うかというようなことになりがちですよ。そこをがんばる前川
君の信念というかデザイン以前の問題ですよ。そういう
ことがやっぱり彼のデザインを育ててきた一つの大きな
エレメントだと思うんです、建築家のすべてが前川君の
何分の一かのファイトと正義感とプライドをもって進めば
建

築家協会は法的措置なんか問題ないですよ。私の手
本は前川君です。このがんばりは我々の精神的な支え
です。坂倉君でもそうだろうと思うんです。

むかしは建築評論家なんてものはなかったし、建築家
を援護する援護射撃がなかった。たいへんな苦しみで
すよ。前川君のところなども、なんにもない、ただ寒々と
したところで、それはみんな苦勞しましたよ。その点、芦
原君なんか幸せなときに独立していますよ。前川君はほ
んとうに大学の背景もないし、まあ大学はでてるけれど
も、大学の教授の研究室とかいう背景はない。

川添 山口先生でも、とにかく終戦直後、何回か差し
押さえられて無一物になられたからなんですからな。そ
ういう苦闘を越えてきていらっしゃるんでしょう。ほんとう
に着るのもまったくなかったなどというような。

文学者なんか、いまはたとえば松本清張なんかたい
へんな収入をとってるけれども、明治の近代文学が成
立していくときなんて、文士なんてみんなそうだったん
でしょう。

死ぬまで自分の作品にかじりついて

山口 そうですね。松本清張だって、あれはずいぶん
今日までには苦勞しているんですよ。いまは百何十
坪の家におさまって……あれはちょっと気に入らないけ
れどもね、だけどあれまでになるためには、金を儲ける
には、そうとうに苦勞して勉強してきているし、話はとん
じゃうけれど志賀直哉先生というのは、昔の貯金で食っ
ている、ああいう人はしょうがないんです。私は年をとっ
ても、正宗白鳥とか室生犀星とか、とにかく死ぬまで自
分の作品にかじりついて、一生懸命やってきているとい

う文学者の方が好きなんです。山羊ひげ生やして、熱
海でのうのとう暮しているような。のは好きじゃないで
すよ。昔はそれは志賀文学というものには、涙こぼして感
激していましたがね。

まあ、死ぬまで一生懸命やるつもりでいますから見て
いて下さい。(終り)